

《Title》

Tekisui Roof Tile excavated from Nagoya Castle Ninomaru Garden (Present document)

《Keyword》

Tekisui Gawara;Tekisui Roof Tile, San Gawara;San Roof Tile, Bunroku-keicho War(Imjin Disturbance, Chongyu War)

註

- (1) 例外として島根県富田城からも滴水瓦は出土している。ただし島根県を含む山陰地方は古代から朝鮮半島との繋がりがあり、対馬同様に日本海を通じて朝鮮半島と隣接しているともいえる。
- (2) 琉球の軒平瓦は明朝系、高麗系、大和系に大別できる。なかでも明朝系と高麗系は滴水瓦である。琉球のグスクから出土している滴水瓦は主に明朝系である。
- (3) 瓦左側が欠損しているものの、版を二度押しした痕跡が左端で確認でき、およそその版の大きさを計測することができた。
- (4) 名古屋城二之丸庭園で2014年に出土した「滴水型棟瓦」の高さが約6cm、名古屋城三の丸遺跡から出土した4点の「滴水型棟瓦」は5~6cmである。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日西遺跡』
 愛知県埋蔵文化財センター 1990『清洲城下町遺跡』
 愛知県埋蔵文化財センター 1992『清洲城下町遺跡2』
 愛知県埋蔵文化財センター 1994『清洲城下町遺跡3』
 愛知県埋蔵文化財センター 1994『清洲城下町遺跡4』
 愛知県埋蔵文化財センター 1995『清洲城下町遺跡5』
 愛知県埋蔵文化財センター 1996『清洲城下町遺跡6』
 愛知県埋蔵文化財センター 1997『清洲城下町遺跡7』
 愛知県埋蔵文化財センター 2002『清洲城下町遺跡8』
 愛知県埋蔵文化財センター 2005『清洲城下町遺跡9』
 愛知県埋蔵文化財センター 2013『清洲城下町遺跡11』
 愛知県埋蔵文化財センター 1990『名古屋城三の丸遺跡1』
 愛知県埋蔵文化財センター 1990『名古屋城三の丸遺跡2』
 愛知県埋蔵文化財センター 1992『名古屋城三の丸遺跡3』
 愛知県埋蔵文化財センター 1993『名古屋城三の丸遺跡4』
 愛知県埋蔵文化財センター 1995『名古屋城三の丸遺跡5』
 愛知県埋蔵文化財センター 2003『名古屋城三の丸遺跡6』
 愛知県埋蔵文化財センター 2005『名古屋城三の丸遺跡7』
 愛知県埋蔵文化財センター 2008『名古屋城三の丸遺跡8』

金子智 2017「江戸瓦の生産と近世瓦の展開」『第66回埋蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—発表要旨・資料集』

木戸雅寿「寺院の瓦から城郭の瓦へ—注近世瓦研究の現状と課題—」1997『帝京大学山梨文化財研究所研究報告集』第8集

清須市教育委員会 2007『清洲城下町遺跡1』

清須市教育委員会 2009『清洲城下町遺跡2』

清須市教育委員会 2012『清洲城下町遺跡3』

清須市教育委員会 2012『清洲城下町遺跡4』

清須市教育委員会 2013『清洲城下町遺跡5』

清須市教育委員会 2013『清洲城下町遺跡6』

清須市教育委員会 2013『清洲城下町遺跡7』

清須市教育委員会 2015『清洲城下町遺跡8』

清須市教育委員会 2019『清洲城下町遺跡10』

杉本宏 2017「棟瓦の成立と格—山城地方を中心に—」『第66回埋蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—発表要旨・資料集』

中井均 2005「滴水瓦の伝播と展開—特に文禄・慶長の役を中心として—」『龍谷大学考古学論集』

名古屋城総合事務所 2017『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第1次~第3次』

名古屋城調査研究センター 2020『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次~第6次』

美濃口紀子 2017「熊本城出土の近世瓦一刻印瓦と瓦師を中心にして」『第66回埋蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—発表要旨・資料集』

山崎信二 2008『近世瓦の研究』

渡辺誠 1995「日本・琉球への近世初期の滴水瓦の伝播」『王朝の考古学』

「水型棧瓦」に見られる特徴で、例えば京都妙心寺の「ろうそく棧」と呼ばれる「滴水型棧瓦」は瓦当全体の中心より瓦当文様がやや小巴よりも寄って描かれている。名古屋城二之丸庭園出土の「滴水瓦」も小巴に0.4mm寄っており、「ろうそく棧」と同様の特徴を持っている。

名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」の左側が欠損していることも仮説②の可能性を高めている。文様が中心からやや左側に寄っていることも仮説②を補強していると考えている。

4 まとめと課題

3-2. 以降で述べたように、棧瓦が普及した近世後期以降の層位から出土している点、先行研究で明らかにされた文様パターンに当てはまらない点から名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」は②「滴水型棧瓦」である可能性が高いと考えている。即ち棧瓦であると考えられる。「均整流水文」の類例について検討が足りなかったものの、「滴水型棧瓦」の文様は花文、家紋、年号といった滴水瓦の文様法則にとらわ

れず、多種多様な文様構成となっており「均整流水文」が特異な文様ではないともいえる。

滴水瓦型の瓦当面を持つ軒棧瓦の名称について「花文瓦・波瓦」、「ろうそく棧」、「朝鮮軒」、「滴水棧」など地方独自の名称が存在し、全国で統一された名称はない。そもそも滴水瓦は平瓦に分類される。平瓦と丸瓦が結合して棧瓦化したように、滴水瓦と丸瓦が結合して「滴水型棧瓦」となったと考えられる。

城郭に滴水瓦を葺く行為は雨水を誘導する機能的なメリットの他に、「文禄・慶長の役に参戦渡海したステイタス」(中井2005)としての役割をもっていたと考えられている。ところが渡海していない徳川家やその家臣が滴水瓦を前城主から引き継いで使用する段階になると文禄・慶長の役を示す象徴的役割を果たさなくなつたと考えられる。また、棧瓦の急速な普及も相まって滴水瓦も棧瓦化したと考えられる。これら「滴水型棧瓦」は滴水瓦が持つ雨水を誘導する機能を継承し、象徴性が失われた瓦であると言える。

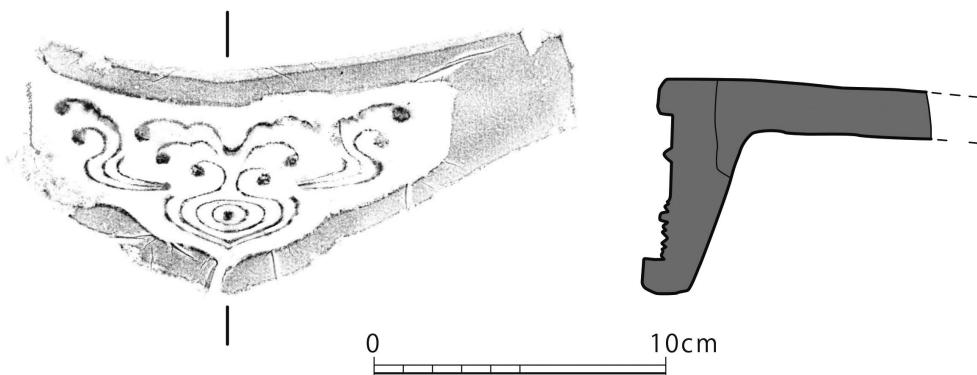


図1 名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」実測図及び拓本

いる。しかし、前述したように滴水瓦は慶長5年(1600)以降に流行するという説に基づけば、福島正則が滴水瓦を使用するのであれば清洲城ではなく慶長5年(1600)に入封した広島城を選択すると思われる。福島正則期広島城で出土していない瓦が清洲越し等によって名古屋城へ運ばれる可能性は低いと言わざるを得ない。

3-3 ③滴水瓦が棟瓦化した「滴水型棟瓦」である可能性

3-3-1 「滴水型棟瓦」について

「愛知県・岐阜県下では棟瓦と結合して波瓦・花瓦などとよばれているが、昭和三四年(一九五九)の伊勢湾台風以後一段と普及した」(渡辺1995)とある。「花瓦・波瓦」と呼ばれる滴水瓦に似た瓦当面をもつ棟瓦が東海地方で見ることができ、滴水瓦の特徴である雨水をスムーズに軒下へ落とす機能が継承されていることが分かる。「花瓦・波瓦」は東海地方だけでなく、熊本では「朝鮮軒」(渡辺1995)と呼ばれている。京都では「滴水棟」として報告されている例もある。このように滴水瓦の瓦当をもつ棟瓦は各地域によって名称が異なっている。

本稿では「花瓦・波瓦」、「朝鮮棟」、「滴水棟」のような滴水瓦の瓦当をもつ棟瓦を便宜的に「滴水型棟瓦」とする。「滴水型棟瓦」は京都妙心寺をはじめ各地の寺社、長崎興福寺等の黄檗宗寺院、また現代では日本各地の中華街や一般住宅等、全国で広く見ることができるような棟瓦である。

3-3-2 名古屋城における「滴水型棟瓦」の出土事例

「滴水型棟瓦」を葺くことと文禄・慶長の役への参加は関連性がみられないため、名古屋城から出土することは異例なことではない。実際

に二之丸庭園でも平成26年(2014)に「滴水型棟瓦」が1点出土し、軒棟瓦として報告されている。「軒平部が滴水瓦で逆三角形を呈す。文様部は中央で画されて両側に左右対称の唐草文(陽刻)が配されている。」(名古屋城総合事務所2017)と報告されている。

二之丸庭園以外では名古屋城三の丸遺跡から出土している。報告では「棟瓦」という分類の中でさらに「滴水瓦」に小分類されている(愛知県埋蔵文化財センター1993)。

名古屋城三の丸遺跡第4次調査においては4点出土している。そのうち3点は表土等から出土しているため、時期は不明である。1点は18世紀中頃から19世紀中頃にかけて存在した塀に伴う石列から出土している。出土点数が1点であるため、塀に伴うものであると言いかることはできないが、「滴水型棟瓦」葺きの塀が存在した可能性を想定することはできる。

文様はいずれも唐草文である。

3-3-3 名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」と「滴水型棟瓦」の比較検討

名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」は高さが7.2cmあり、他の名古屋城出土の「滴水型棟瓦」に比べてやや大きい。

文様は2014年に二之丸庭園から出土「軒棟瓦」の文様は中心に枠を設け、左右に唐草を配するもので、名古屋城三の丸遺跡出土瓦は唐草文である。

しかし名古屋城における「滴水型棟瓦」の出土数は軒丸瓦や軒平瓦の出土数に比べると圧倒的に少ないものの、「滴水型棟瓦」が名古屋城で見られることは不自然なことではない。

また、「滴水型棟瓦」の特徴として小巴と接続した際、視覚的なバランスをとるために瓦当の文様の中心を滴水瓦部全体の中心よりややずらした位置に配する瓦がある。これは一部の「滴

する。琉球でよく見られるタイプは明朝の流れをくむもので現代の中国でも見ることができる。また、長崎の黄檗宗寺院や現代日本の中華街や南京町といった中国との関りが強い地域や建物でも見ることができる。

3 名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」の再検討

3-1 名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」について

名古屋城二之丸庭園で出土した「滴水瓦」は向かって左側が一部欠損しているものの、瓦当面の残存状況は良好である。平瓦部は後部全体が欠損している。そのため長さ、幅は不明である。高さは7.2cmである。瓦当面と瓦当面側面は焼がないが、平瓦部は焼がかけられている。

「滴水瓦」は北池の東側から近世後半から近代以降の遺物とともに出土している。遺物全体の年代幅が広く、層位から年代を限定するのは困難である。

瓦当面が平瓦部に対して90°に近い角度で接続(図1)しており、取り付け角120°である1600～1617年代の滴水瓦より新しいものと考えることができる。

文様は「均整流水文」(図1)と報告されているように中心飾りに花、家紋、年号のいずれにも該当しない文様構成となっている。文様はやや左側に寄って版押しされている。二度押しされた痕跡から推定すると中心の珠文から押版部右端まで7.4mmに対して、左端までは7mmとわずかに左側に寄っている。

文様の名称について「流水文」と報告されているが、中心飾りが形骸化した唐草文の様に見える。どちらにせよ類似する文様を持つ滴水瓦は近世城郭にない。

名古屋城は慶長15年(1610)に築城が始まり、同19年(1614)に尾張藩主徳川義直が駿府城から名古屋城へ居を移した。名古屋城築城期に滴水瓦が存在したのであれば、前述した姫路城、和歌山城や熊本城など渡海した大名が滴水瓦を持つ城郭より10年程度遅れる。徳川義直はもちろん父である家康も朝鮮半島には渡海していない。前述したように取り付け角が90°に近いため、他城郭で1600年～1617年に葺かれた滴水瓦とは角度が異なる。名古屋城は徳川家による新規築城なので姫路城のように渡海していた前城主が滴水瓦を葺き、それを継承したタイプでもない。

以上の様に名古屋城二之丸出土の「滴水瓦」は取り付け角、文様、滴水瓦使用大名の特徴がいずれも既存の滴水瓦研究の分類方法に当てはまらない。そこで名古屋城二之丸出土の「滴水瓦」の正体について考えられる可能性として2つの仮説を提示する。①清洲城に葺かれていた滴水瓦を名古屋城へ流用した。②滴水瓦が棟瓦化したいわゆる「花瓦・波瓦」(以下「滴水型棟瓦」とする。)であるという2つの可能性を上げることができる。①清洲城に葺かれていた滴水瓦を名古屋城へ流用したと②滴水瓦が棟瓦化したいわゆる「滴水型棟瓦」について次章以降で検討していく。

3-2 ①清洲城に葺かれていた滴水瓦を名古屋城へ流用した可能性

①清洲城に葺かれていた滴水瓦を名古屋城へ流用したものである場合、滴水瓦は文禄の役に参加した福島正則が現地で収奪もしくは模倣したものが清洲城に葺かれたものと考えられる。ところが清洲城から滴水瓦は出土していない。文禄・慶長の役に参加し居城に滴水瓦を葺いた大名の多くは関ヶ原合戦後の新規築城または既存城郭の大規模改修後に滴水瓦を葺いて

〈資料紹介〉名古屋城二之丸出土の「滴水瓦」について

高橋 圭也

キーワード

滴水瓦 棟瓦 文禄・慶長の役

1 はじめに

名古屋城では二之丸庭園修復整備に伴う発掘調査を継続的に行っている。平成29年(2017)に実施した第5次調査で北園池、旧将校集会所跡、枯池を発掘した。その中で北園池東側から「滴水瓦」が出土している。報告書では「滴水瓦の軒平の瓦当である。文様区にはシャープな均整流水文がみられる。瓦当全面、その端面、側面、瓦当に接する上面端部が意識的に燻しを行ってなく明白褐色を呈する。」(名古屋城調査研究センター2020)と報告されている。

17世紀に築城された城郭において出土する滴水瓦は文禄・慶長の役で朝鮮半島に渡海した大名が使用している例がほとんどである。朝鮮半島に渡海していない徳川家やその家臣が17世紀初頭の段階で居城に滴水瓦を使用する例は以下の2パターンがあげられる。前城主によって葺かれた滴水瓦の形状を引き継いで新たに製作したパターン、前城主が葺いたものを継続して使用したパターンである。前者は姫路城における榎原家と酒井家であり、後者は和歌山城の紀伊徳川家である。

名古屋城は築城時から一貫して尾張徳川家が城主であり、この2パターンには当てはまらない。また、他城郭に類例のない文様構成であることもあって、名古屋城二之丸庭園出土の「滴水瓦」が新パターンであれば先行研究の枠組みから外れた新しい事例である。そこで、本稿では名古屋城二之丸庭園出土「滴水瓦」がはたして滴水瓦であるのかといった根本から再検討を行う。

2 滴水瓦について

近世における滴水瓦は基本的に文禄・慶長の役後に日本で普及した瓦で文禄・慶長の役に参加した大名が所有する城郭や屋敷、菩提寺に葺いたとされている。

滴水瓦は中国を発祥とする瓦で琉球王国や対馬等の日中・日韓国境付近を中心に文禄・慶長の役以前から見ることができるが、17世紀初め文禄・慶長の役の副産物である朝鮮半島から日本への技術流出を背景に西日本を中心に流行する。近世城郭では慶長5年(1600)～元和3年(1617)という短い時期に急激に流行する(中井2005)。

形態は17世紀初め頃の滴水瓦は瓦当面が逆三角形で、雨水をスムーズに軒下へ落とすために瓦当面が平瓦部に対して120°で接続している(渡辺1995)。接続角は次第に形骸化し、軒丸瓦・軒平瓦のように瓦当面が平瓦部に対して90°に近い角度で接続するようになっていく(渡辺1995)。

文様は文禄・慶長の役以前から葺かれていた対馬金石城と島根県の富田城が蓮華文である。それ以外の城郭では家紋もしくは製作年を中心飾りとするタイプである。

製作年を中心飾りとするタイプは朝鮮半島で一般的にみられるものであり、日本では17世紀の城郭でよくみられる。このタイプは朝鮮半島の模倣もしくは現地から収奪したものである。

中心部に家紋を描くタイプは元来から日本で瓦当文様を家紋とする軒丸瓦が存在しており、それを滴水瓦へ応用した文様だと考えられる。

琉球では花を形象化した文様を中心飾りとし、左右に葉を形象化した文様を配するタイプ⁽²⁾で金石城と富田城で見られるタイプにやや類似